財団法人　市原市文化財センター調査報告書　第72集

あね さき ひがし はら

市原市姉崎東原遺跡C地点(2)

2000

有限会社　エヌテイケイ
財団法人 市原市文化財センター

序　　文

市原市は房総半島のほぼ中央にあって、恵まれた自然環境のもと、古来より人々の生活の舞台となってきました。旧石器時代から中世にいたるまで、その痕跡は埋蔵文化財として、今日まで市内各所に残されています。

まもなく終わりを告げようとしているこの20世紀は発掘調査により、様々な成果が公表されています。これらの成果は大小の開発行為の増加と密接な関係にあることは今更申すまでもありませんが、新たな知見を加えた事例については枚挙にいとまがないと言っても過言ではないでしょう。21世紀にむけて、種々の難問が待ち構えているかもしれませんが、持続的な発展を期待するところです。

ＪＲ内房線の姉ヶ崎駅の東方には、千葉県指定文化財である、姉崎天神山古墳、姉崎二子塚古墳をはじめとする姉崎古墳群があり、一帯は古墳時代には上海上国造の本拠地として、活発な文化の交流があったと考えられています。平安時代には、姉崎神社が式内社として文献上に現れるなど、連綿として、歴史を築いてきたことが伺えます。

今回ここに報告します姉崎東原遺跡Ｃ地点は、姉崎天神山古墳に近接する箇所の宅地造成に先行して発掘調査を実施したものです。周辺ではこれまでも調査が行われ、弥生時代中期から古墳時代にかけての資料がまとまって出土しています。この度の調査は130㎡という非常に限られた範囲の調査でしたが、斜面地に平安時代の住居跡が検出されるなど、新たな知見を加えることができました。

この報告書が学術資料としてはもとより、埋蔵文化財の保護と理解のために広く市民の皆様に活用していただければ幸いです。

最後に、発掘調査ならびに本書の刊行にあたり、ご指導・ご協力をいただきました、有限会社エヌテイケイ、千葉県教育庁文化課、市原市教育委員会ふるさと文化課をはじめとする関係諸機関に対し、感謝の意を表します。

平成12年 3 月27日

財団法人 市原市文化財センター
理事長　小　茶　文　夫

例　　言

1．本書は、市原市姉崎2709の一部に所在する姉崎東原遺跡Ｃ地点（調査コード　セ298）の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2．発掘調査から報告書刊行にいたる業務は、有限会社エヌテイケイの委託を受け、財団法人市原市文化財センターが実施した。
3．調査面積は130㎡である。
4．発掘調査・整理作業の担当者および実施期間は下記の通りである。
　発掘調査　担当者　高橋康男　調査期間　平成11年７月29日～８月６日
　整理作業　担当者　高橋　　整理期間　平成11年８月９日～８月25日
5．本書の編集および執筆は高橋が行った。
6．遺物実測図の縮尺は弥生土器、土師器の甕・支脚を１／４とした以外は１／３である。
7．本書で使用した図面の方位は座標北である。

本　文　目　次

1．調査にいたる経緯 …… 1
2．遺跡の位置と環境 …… 1
3．調査の概要 …… 3
4．調査した遺構・遺物 …… 3
5．まとめ …… 5

挿　図　目　次

第１図　遺跡の位置と周辺の主な遺跡 …… 2
第２図　姉崎天神山古墳と姉崎東原遺跡 …… 2
第３図　遺構配置図 …… 3
第４図　００１・００２実測図 …… 4
第５図　００３出土遺物実測図 …… 6

写真図版目次

図版１　調査前　遺跡全景　００１　００２　地山整形とピット群　出土遺物（１）
図版２　出土遺物（２）

１．調査にいたる経緯

今回の発掘調査は、有限会社エヌテイケイによる宅地造成に先行して実施したものである。今回調査を実施した部分を含む一帯5,000㎡に関しては、平成５年度に発掘調査が実施され、報告書も刊行されている(1)。今回調査した箇所は、平成５年度段階で遺構の存在が確認されていたが、事業者との協議の結果、本調査の実施には至らなかった部分である。今般、有限会社エヌテイケイより、地区内における埋蔵文化財の所在の有無及びその取り扱いについての照会が提出されたのを受け、上記経緯をふまえて、千葉県教育庁文化課、市原市教育委員会ふるさと文化課、事業者による協議の結果本調査を実施する運びとなった。

(1)　桜井敦史『財団法人市原市文化財センター調査報告書　第54集　市原市姉崎東原遺跡Ｃ地点』1994

２．遺跡の位置と環境（第１・２図）

遺跡は養老川左岸の沖積地に接する台地の、縁辺からやや奥まった南側斜面に位置する。遺跡の北西約100ｍには、千葉県指定文化財である姉崎天神山古墳がある。一帯は、大小様々な開発に伴い、発掘調査例は比較的多い。紙幅の都合もあり、ここではそれらを網羅的に述べることは割愛するが、台地上の調査だけでなく、低地上の調査も増加傾向にあり、また、時代的にも断続的ながら縄文時代から中世にまで及んでいる。

姉崎東原遺跡の調査は、今回で６度目にあたる(2)。これまでの調査の成果を簡単に総括しておきたい。縄文時代については、早期の撚り糸文土器や、後期の加曽利Ｂ式や安行式の出土は認められるものの遺構の検出にはいたっていない。遺跡の西方約200ｍにある姉崎台貝塚の影響がおよんでいるものと考えられる。弥生時代は、中期宮ノ台式以降の遺物がまとまってみられるようになり、この時期から集落の形成がはじまったと考えられる。集落は古墳時代前期まで継続する。Ｂ地点で検出された前方後方墳や姉崎天神山古墳に代表されるような墓域の形成期がその後に続く。古墳時代後期鬼高式以降、ふたたび住居跡が見られるようになるが、散発的である。なお、中世以降は、今回の調査地点を含む斜面部の帯曲輪状の地形が中世城郭関連遺構とも推定されているが、確証を得るにはいたっていない。

今回の調査地点は、この帯曲輪状の地形の一角を占める、標高約23ｍの平坦部である。弥生時代の集落が検出された台地上との比高差は10ｍある。

(2)　姉崎東原遺跡に関する調査報告書は以下の通り（遺跡発表会要旨等は除く）。

Ａ地点　確認・本調査　高橋康男　『財団法人市原市文化財センター調査報告書　第31集　市原市姉崎東原遺跡』1990

Ｂ地点　確認調査　忍澤成視「姉崎東原遺跡Ｂ地点」『平成２年度　市原市内遺跡発掘調査報告』市原市教育委員会　1991

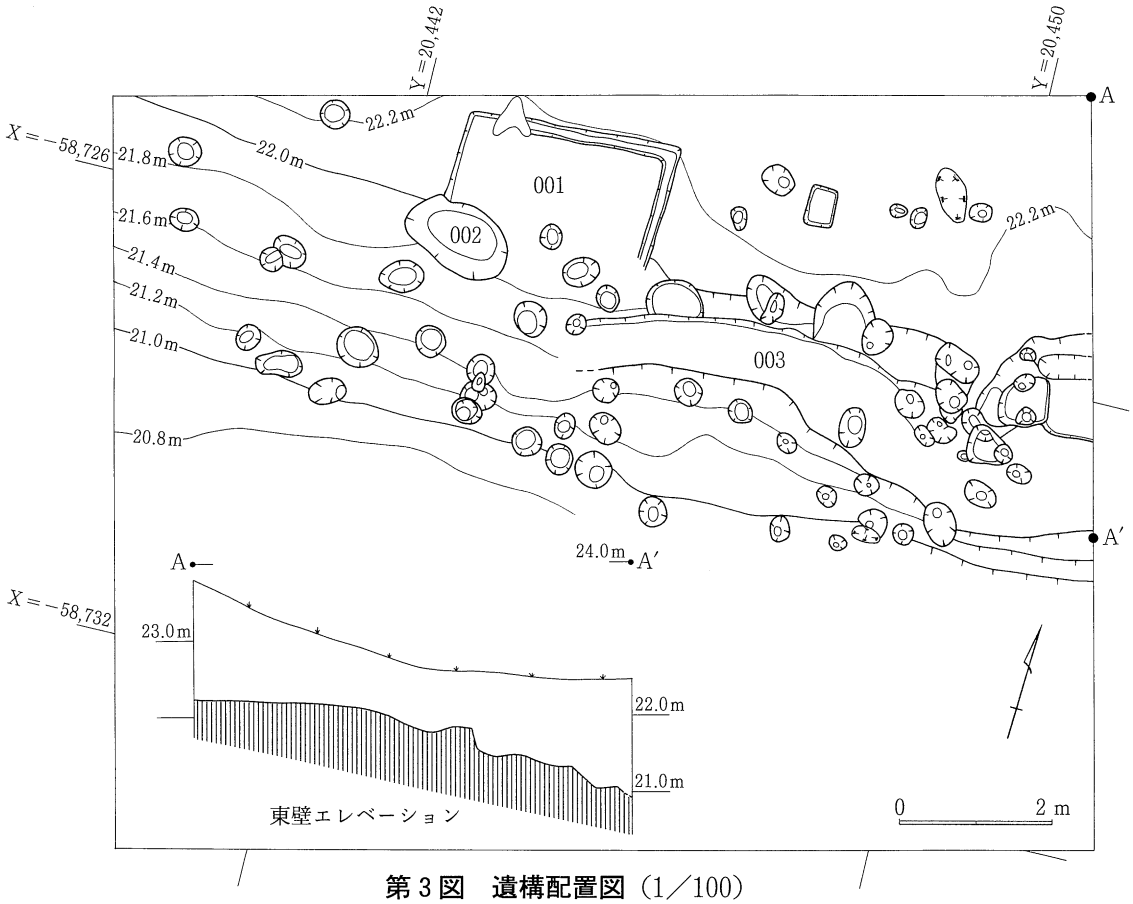
本調査　高橋康男『財団法人市原市文化財センター調査報告書　第51集　市原市姉崎東原遺跡Ｂ地点』1993

Ｃ地点　確認調査・一部本調査　前掲(1)

Ｄ地点　確認調査　浅利幸一「姉崎東原遺跡Ｄ地点」『平成４年度　市原市内遺跡発掘調査報告』市原市教育委員会　1993

第１図　遺跡の位置と周辺の主な遺跡（1／20,000）

第２図　姉崎天神山古墳と姉崎東原遺跡（1／2,000、遺構は主要なものに限定した）



第３図　遺構配置図（1／100）

３．調査の概要（第３図）

今回の調査は、調査の経緯で触れたように確認調査の結果を受けて実施したものであるが、確認調査から既に５年経過しており、周辺地形にも若干の相違が生じていた。そのため、調査の手順としては、確認調査時の１・２号トレンチの痕跡を確認することから始めた。重機により表土をトレンチ状に掘削し、その痕跡が確認されたので、改めて本調査範囲を確定し、本格的な表土除去作業を行った。表土は黒褐色土で、細かい粘土粒、ローム粒を多く含むもので、この層の直下に黄褐色の砂層が検出された。この砂層は調査区北東で顕著であったが、全面的に検出された層ではない。粘性の強い層、砂利混じりの層、暗褐色の層など、斜面部のせいもあっていわゆる地山層は不均一であった。調査前の現地は、比較的平坦な地形であったが、表土と判断した黒褐色土層は、南ほど厚さを増し、調査区南辺では２ｍを越えることが明らかとなった。作業日程および安全確保の点から、調査区全面にわたってこの表土を除去することは断念し、適正な深度までの掘削に留めた。

測量については、表土除去終了後、市の基準点をもとに実施し、方眼杭を打設した。面積が狭小こともあり、グリッドの設定は行わなかった。遺構番号は着手順に001から附した。土坑を含む地山整形およびピット群については003として一括した。

整理については通常の方法によった。

４．調査した遺構・遺物

（１）**001**（住居跡、第４図）　調査区の北縁中央よりやや西に寄った部分で検出した。確認調査段

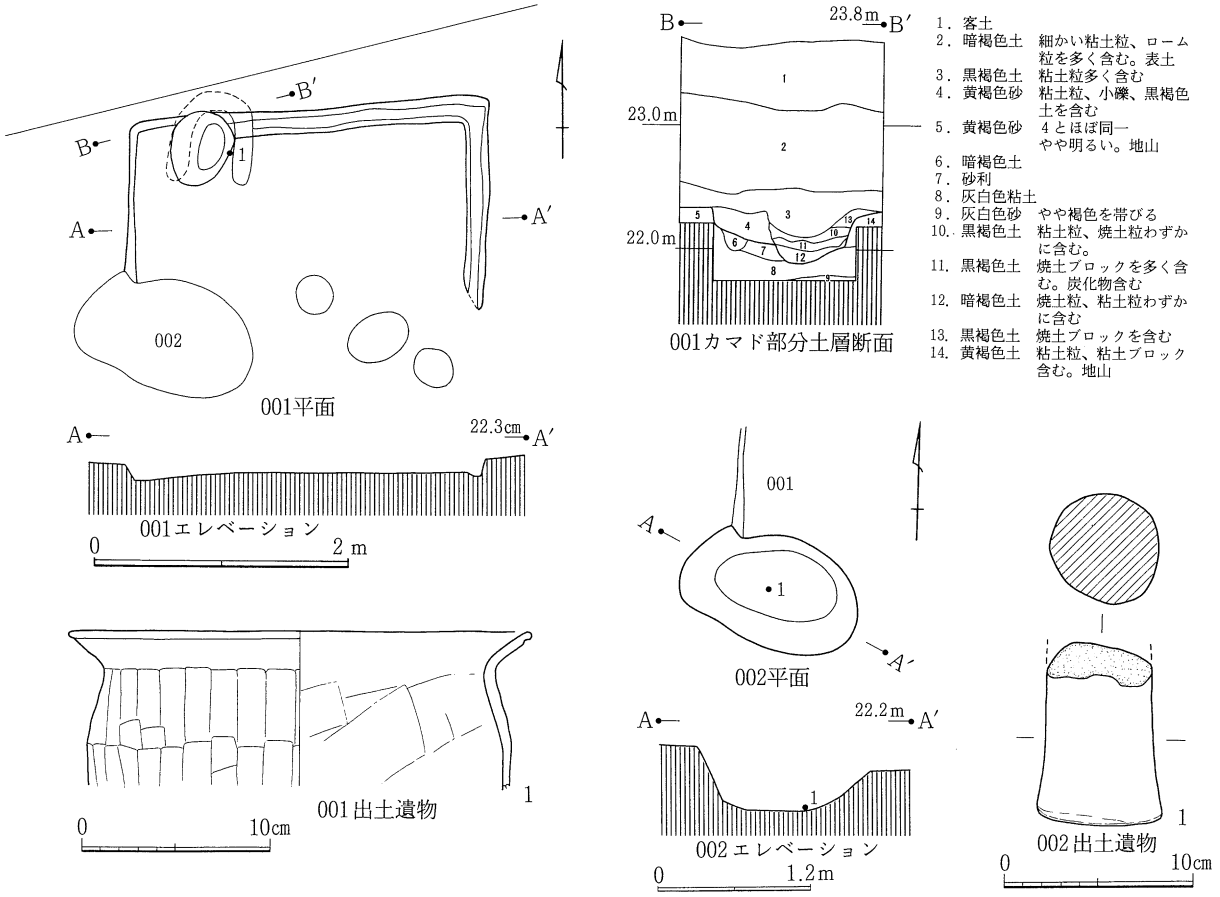
階で存在が確認されていたものである。南半は流出したと考えられ、住居全体の約１／２の調査となった。

カマドの右ソデ部分は、確認調査段階で調査済みである。完存した北辺で2.8ｍを計る。床は、硬化した部分あるいは異質な土を張った部分も確認されなかった。この住居跡の確認面は砂層であったが床面では硬化したブロックを含む層が地山となっていた。カマドは、北辺のやや西に寄った部分で検出された。カマドの右ソデから東方に壁に沿って周溝が検出されたが、カマドの反対側では検出されなかった。カマドの焚き口部分は約20㎝掘り下げられており、この部分の覆土中位では焼土ブロックの堆積が認められた。遺物は、この焚き口部分から図示したような土師器の甕が出土している。口径は、24.6㎝、外面口縁直下がわずかに屈曲する。胴部は外面は縦位のケズリ、内面は幅広い斜位のナデである。

（２）**002**（土坑、第４図）　001の西辺を切る形で検出された。長軸1.6ｍ、短軸1.9ｍの楕円形を呈する。堀込みの深さは、約40㎝である。この土坑の性格は不明であるが、底面に接する形で、支脚が一点出土している。

支脚は、上方を欠いているが、残存部をみる限り、全体に砂を多く含む。横断面は歪んだ円形を呈している。なお、実測図の正面側は強く火を受けたようで、堅く焼き締まっている。

（３）**003**（地山整形痕、第３図）　上記以外の遺構を地山整形痕として、一括して扱う。表土下の地山面は、特に東寄りで段状の改変が行われている。この改変と同時期と断定する材料は欠くが、ピッ



第４図　001・002実測図

ト群や、やや大きめの土坑ともいえる掘込みが、散在している。ピットは直径30～40㎝、深さは20㎝前後のものが多い。いずれも、規則的な配置とは認められず、建物跡の柱穴とはみなし難い。斜面であるところから、軽易な土留め施設の痕跡かもしれない。

この部分の覆土からは、第５図に示したような多様な遺物が出土している。地山整形以降の流入と考えられる。近世初頭の陶器を含むところから、地山整形はそれ以前と考えられ、このことから、周辺一帯で見られる平場の形成はそれ以降であることを示している。

第５図１から15は縄文土器である。１は撚り糸文土器。２は器壁がうすく、縄文上に横位の沈線が４条認められ、赤彩の痕跡がある。加曽利Ｂ式の注口土器の一部の可能性がある。６を除く３～８は、加曽利Ｂ式の粗製の深鉢の口縁部である。３、４、５については、内面口縁部直下に浅い沈線が巡る。７、８は、やや肥厚する口縁下に２条の平行沈線が巡り、沈線間には刻みがある。６は曽谷式あるいは安行式の深鉢であろう。９から15は胴部の破片である。９、11、12、13は加曽利Ｂ式、10は安行式の深鉢の紐線文部分。14は縄文上に３本の平行する細い沈線がある。15は横位の施文が特徴的である。

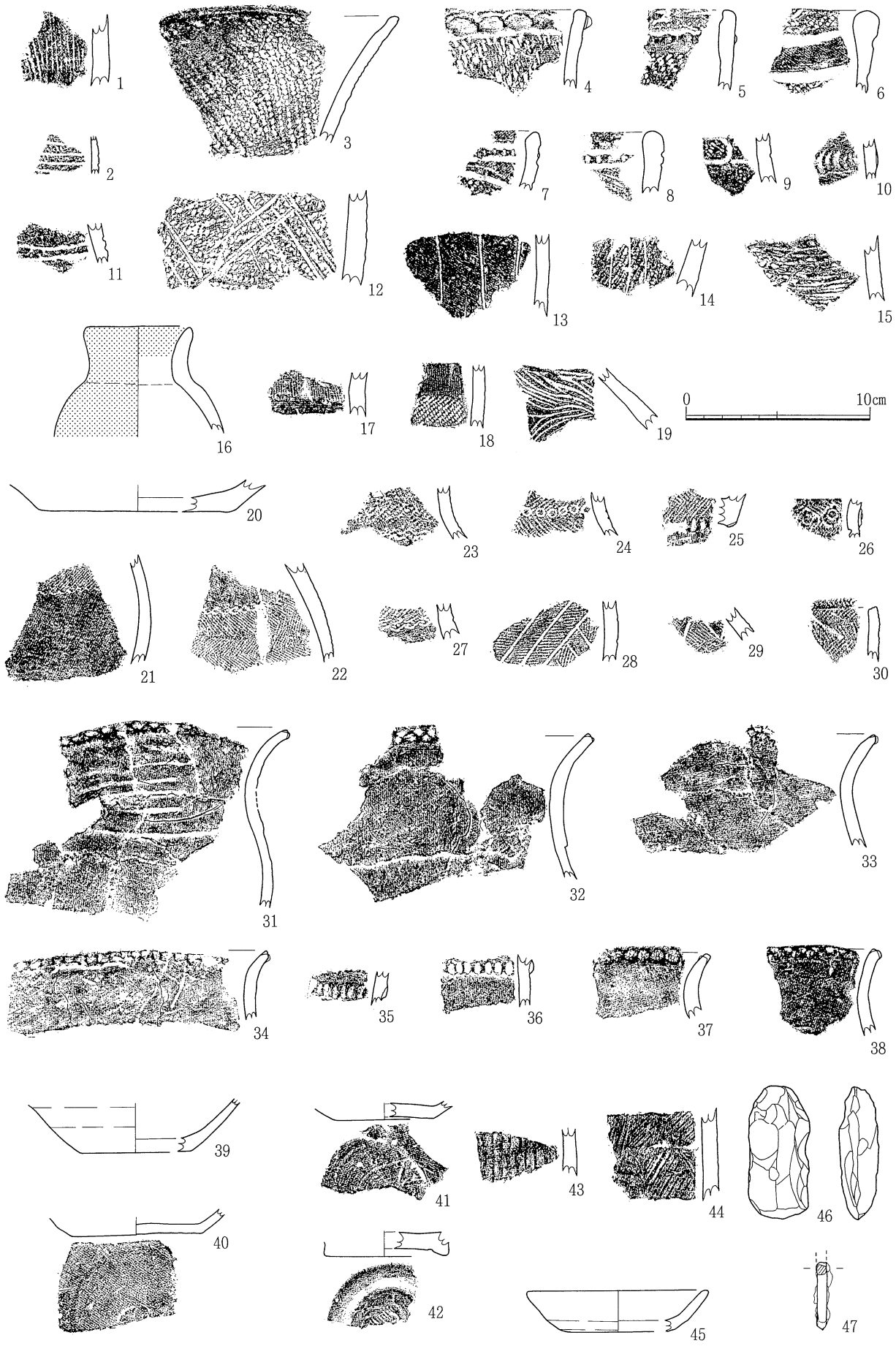
16～38は弥生土器である。16は無文の小型の壺。赤彩されている。17から19は宮ノ台式であろうか。17は、この時期の壺特有の、突帯の巡る頸部の突帯部分が剥落したものと考えられる。剥落した部分には縦位のハケ目が見える。18は区画のない帯縄文部分、19は沈線による曲線的な施文である。文様の全体は不明であり、時期の対比もやや不安定である。20から22は同一個体と思われる壺である。上下を二条の結節文により区画した内部に最低４条の羽状縄文が施される。23、24、27は文様のある頸部、25、26は口縁部、28、29は胴部である。29の無文部には赤彩されている。30は口唇部にも縄文があり、鉢と考えられる。31～38は甕である。31は頸部に部分的に輪積み痕を残す。口唇部は二方向からの押圧。32は頸胴接合部のみに輪積み痕を残す。33は胎土、口唇部の爪形の押圧が32と類似し、同一個体の可能性がある。35、36は同一個体と思われ、頸胴接合部分に縄による押圧が巡る。37は口唇部に上方からの一方向の縄による押圧が巡る。34、38の口唇部の施文は不明瞭で、特に34はかなり雑な印象を受ける。16および20～38はいずれも弥生時代後期に属すると考えておきたい。

39から42は平安時代のロクロ土師器。39は底部を欠く。底部調整は、40は回転ヘラケズリ、41は回転糸切り無調整。42は中央付近のみに回転糸切り痕を残し、内面黒色処理されている。43は土師質で外面に縦位のタタキ目が残る甕、44は斜め方向のタタキが残るやや毛色の異なる土器で断面中心部は黒褐色、外面寄りは橙色を呈する。

45は近世初頭の瀬戸・美濃系の陶器である。46はホルンフェルス製の打製石斧、47は釘と思われる鉄製品である。

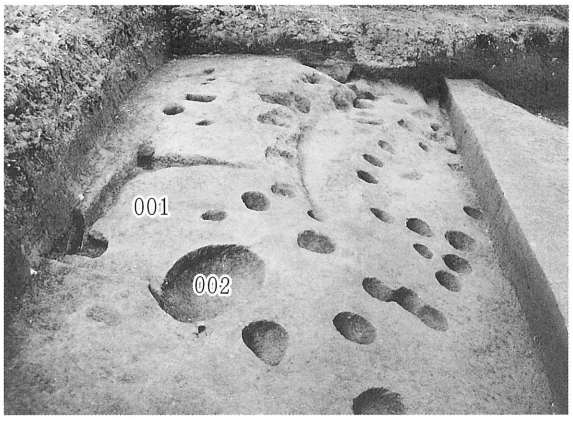
５．ま と め

130㎡の斜面部での調査であったが、平安時代の住居跡・土坑、近世初頭以前の地山整形痕の存在が明らかになった。確認調査での所見と隔たる点は少ないが、台地平坦面より約10ｍ低い個所での平安時代の住居跡の検出は、当時の集落景観を考える上で貴重である。出土した土器は、縄文時代後期、弥生時代後期が主だが、これは台地上の当該期の様相を反映したものであろう。


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
0
10cm
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47

第５図　003出土遺物

調査前



遺跡全景（西から）

001住居跡

002土坑

地山整形とピット群(1)

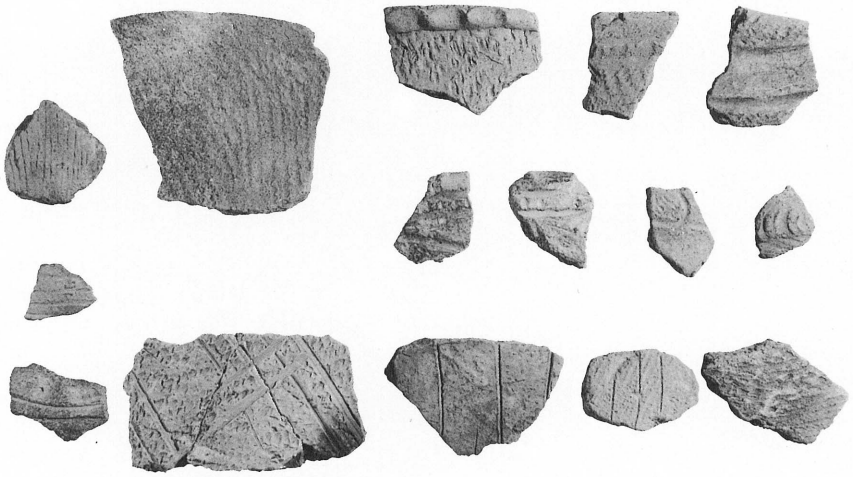
地山整形とピット群(2)

地山整形とピット群(3)

001出土遺物

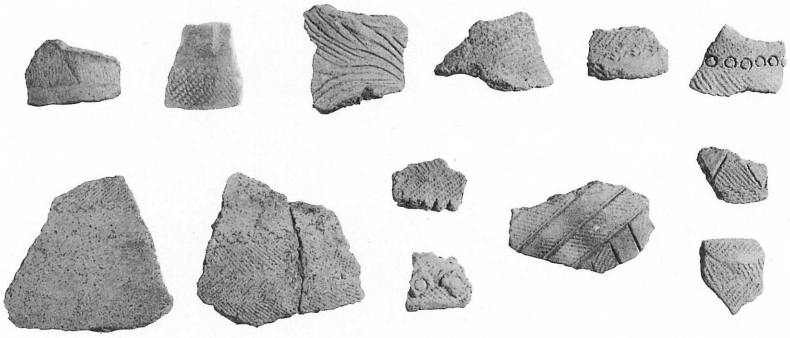
002出土遺物

出土遺物(1)



縄文土器

石斧



鉄製品

弥生土器

近世陶器

平安時代の土器

出土遺物(2)

報　告　書　抄　録

ふりがな	いちはらしあねさきひがしはらいせき
書名	市原市姉崎東原遺跡Ｃ地点(2)
副書名	
巻次	
シリーズ名	財団法人市原市文化財センター調査報告書
シリーズ番号	第72集
編著者名	髙橋康男
編集機関	財団法人市原市文化財センター
所在地	〒290-0011　千葉県市原市能満1489番地　　TEL 0436 (41) 7300
発行年月日	2000年３月27日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
あねさきひがしはらいせき 姉崎東原遺跡Ｃ地点	千葉県市原市姉崎2709の一部	12219	セ298	35度 28分 13秒	140度 3分 31秒	19990729 ～ 19990806	130	宅地造成に伴う事前調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
あねさきひがしはらいせき 姉崎東原遺跡Ｃ地点	集落跡	平安時代	竪穴住居跡　１軒 土坑　１基 地山整形痕　１	縄文土器、弥生土器、土師器、近世陶器、石器など。	南向き斜面地において平安時代の住居跡や地山整形痕が検出された。

財団法人 市原市文化財センター調査報告書 第72集

市原市姉崎東原遺跡Ｃ地点(2)

平成12年３月24日　印刷
平成12年３月27日　発行

編集　財団法人 市原市文化財センター
発行　財団法人 市原市文化財センター
千葉県市原市能満1489番地
Tel 0436 (41) 7300

有限会社　エヌテイケイ
印刷　三陽工業株式会社